

群 教 セ	G01 - 02
	平26.254集
	国語 - 小

自分の思いや考えを意欲的に書くことができる児童の育成

——相手意識や目的意識を持つ指導の工夫を通して——

特別研修員 宇都野 理恵子

I 研究テーマ設定の理由

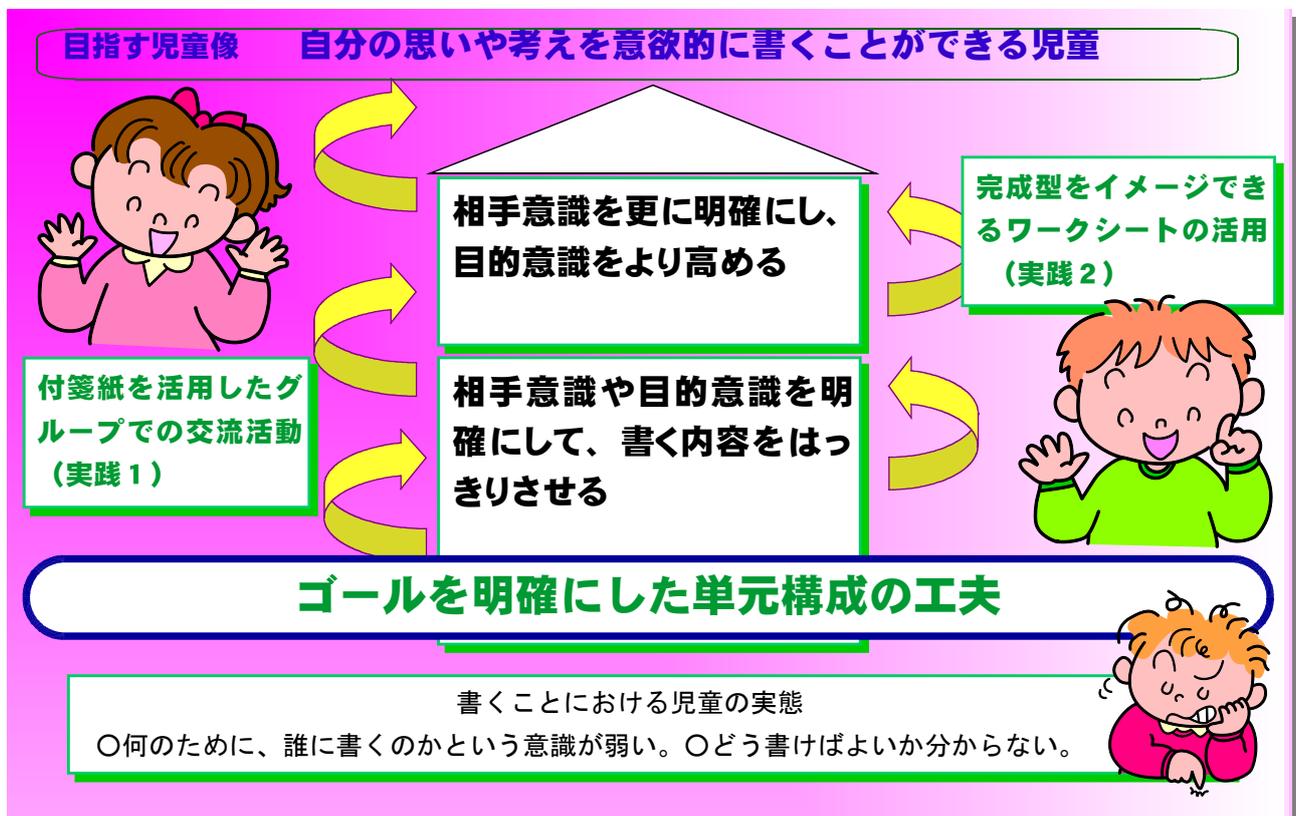
「はばたく群馬の指導プラン」では、「書くこと」において「自分の考えや伝えるべき内容を相手や目的に応じて表現すること」が課題であるとしている。本校においても児童観察やアンケートから「何を書けばよいか分からない」「どう書いたらよいか分からない」「上手に書けないので嫌い」等、書くことに対して苦手意識を持っている児童が多い実態が見られる。これは、何のために、誰に書くのかという、相手意識や目的意識が弱いこと、書くことへの意欲が高まっていないことが原因であると考えられる。

そこで、本研究では自分の思いや考えを意欲的に書くことができる児童の育成を目指すこととした。そのためには、ゴールを明確にした単元構想の上に二つの段階を踏むことが必要だと考える。まず、付箋紙を活用したグループでの交流により、相手意識や目的意識を明確にして書く内容をはっきりさせる段階を設定する。次に、ワークシートの工夫及びグループ交流により相手意識を更に明確にし、目的意識をより高める段階を設定する。

これらにより、自分の思いや考えを意欲的に書くことができる児童を育成できると考え本主題を設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

(1) 実践 1 における研究上の手立て

単元名 「東組の問題点を調べて報告しよう」

教材名 「調べたことを報告する文章を書こう」

- 「学級の良い点と問題点を調べて明らかにし、クラス内で報告し合う」という学習のゴールを設定した単元構想。
- 付箋紙を活用したグループでの交流活動。

「学級の良い点と問題点を調べて明らかにし、クラス内で報告し合う」という単元のゴールを設定したことで、児童は主体的に学習に取り組むことができた。また、学級の問題点について調べ、その後分かったことを付箋に書き、書いた付箋を基にグループで交流する活動を取り入れたところ、クラスの問題点を報告するという目的を意識しながら、自分の考えをはっきりさせている児童が多く見られた。

しかし、グループでの交流活動では目的を意識できたが、単元を通して常に目的を意識するまでには至らなかった。また、学級内での報告という設定であったため、相手が身近すぎて相手意識が弱くなってしまったという課題も残った。そこで、実践 2 では(2)のように手立てを工夫し、改善を図った。

(2) 実践 2 における研究上の手立て

単元名 「3年生に委員会紹介リーフレットを作って贈ろう」

教材名 「アップとルーズで伝える」「説明を工夫してリーフレットを作ろう」

- 「3年生のために委員会活動を紹介したリーフレットを作り、委員会選びの参考にしてもらおう」という学習のゴールを設定した単元構想。
- 完成型をイメージできるワークシートの工夫。

「自分の委員会活動を、次年度初めて委員会選びをする3年生の参考になるようリーフレットにまとめて贈る」という単元のゴールを設定したことで、児童の学習への意欲を喚起し、相手意識や目的意識を継続して持たせるのに有効であった。また、構想メモのワークシートをリーフレットと同形式に工夫したことで、単元を通して常に相手意識、目的意識を持たせることができた。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

グループで交流することにより、児童は自分の書きたいことを明確にすることができ、仲間の意見を参考にしたり、自分の考えを認められたりして、意欲的に書くことができた。また、単元を通じた学習のゴールを具体的に設定したり、完成品を意識できるように工夫したワークシートを活用したりすることにより、児童の相手意識、目的意識を継続させることにつながり、相手意識や目的意識を持って書くことができた。

2 課題

交流活動を充実させるためには、ある程度の回数を経験することや、ルールを決めておくことが必要である。また、互いが高め合い、認め合えるような交流活動にするには、国語科だけではなく他教科等でも積極的に取り入れる必要がある。

3 提言

書くことに自信を持たせるには、まず、児童が自分の思いや考えを明確にすることが必要である。書くことを明確にするためには、児童同士が意見を交流し、自分の考えを広げたり深めたりする必要がある。また、目的意識や相手意識をしっかり持てると何のためにどう書くかがはっきりしてくる。さらに、「書いてみたい」という思いも持たせることができる。つまり、書こうという気持ちを持たせ、何を書きたいかを明確にする工夫をすることで、児童は意欲的に書くことができるであろう。

<授業実践>

実践 1

- 1 単元名 「東組の問題点を調べて報告しよう」
教材名 「読書生活について考えよう」光村図書（第4学年 1学期）

2 本単元及び本時について

本単元は、児童自らが実地調査（アンケート）で調べたことを表やグラフに整理し、それらに対して原因や理由を考え、文章にまとめる学習を行う単元である。それによって、原因や理由を書き分けながら、自分たちの生活への関心を調査研究を通して高めていく学習経験をする。本時は、全12時間計画の第6時に当たる。アンケート結果を考察することにより、報告書に書きたいことをはっきりさせることをねらいとしている。調べた結果から考えたことを明確にするため、また、書きたいことをはっきりさせるために、次のような手立てを具現化した。

3 授業の実際

導入においては、アンケートの結果について考え、「報告文に書きたいことをはっきりさせよう」という学習課題を確認した。

そして、図1のような事前に集計しておいた各班のアンケート結果を見ながら、それぞれの班で自分たちのアンケート結果から分かったことに対する良い点や問題点を付箋紙に書き込ませた。良い点は黄色い付箋紙を、問題点は水色の付箋紙を使用し、ワークシート上で、視覚で捉えやすいように色分けをした（次頁図2）。

その後、書き込んだ付箋紙を基にして、同じ意見や似た意見の場合は、付箋を重ね、そうでない場合はなるべく見えるように台紙に貼りながら話し合いをさせた（次頁図3、次頁図4）。

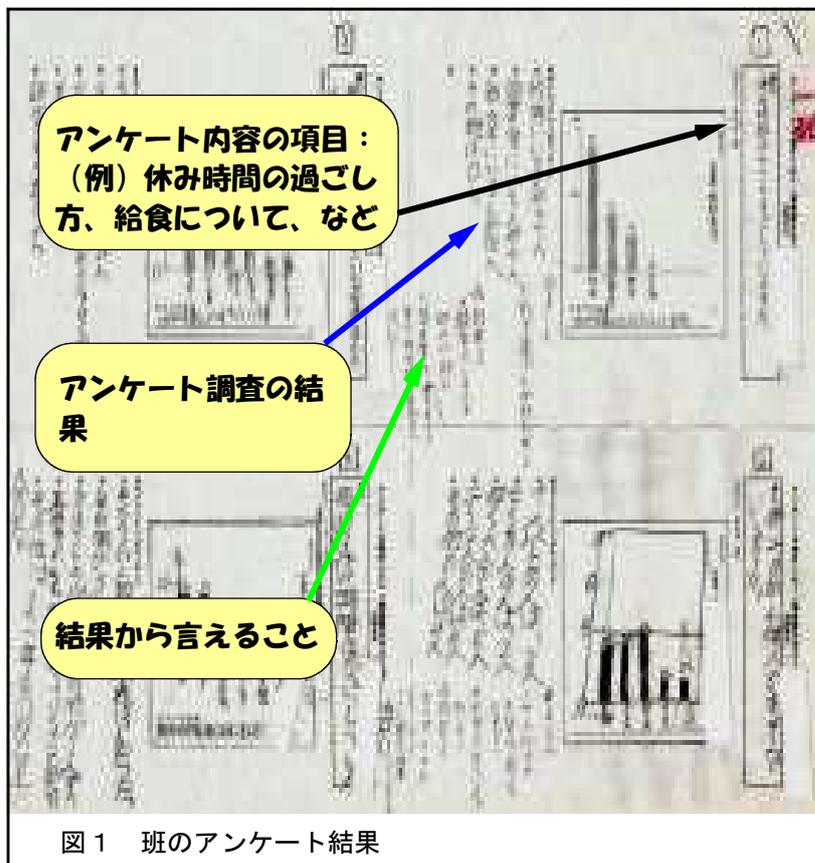
実際には似たような意見が多く見られ、意見の広がりに関しては、物足りなさが残ったが、数少ない意見は、児童にとって新鮮であり、考えが広がることにつながったようである。

最終的には、話し合いで得た仲間の考えを取り込んで、報告書を仕上げている児童も複数見られた。

一方、同じような意見が目立ったグループでも、自分と同じ意見を仲間も持っていることに気付くことができた様子である。そのことで自分の考えに自信を持つことができ、同じ考えを基にしてグループ内の話し合いが活発化した。

普段は、自分の考えに自信を持って、話し合いに参加できないことが多い児童も活発に意見を出していた。

これらの話し合いを通し、自力でなかなか自分の考えを持ってない児童も仲間から付箋紙で意見をもらうことにより、自分の考えを広げ明確にしている姿も見られた。



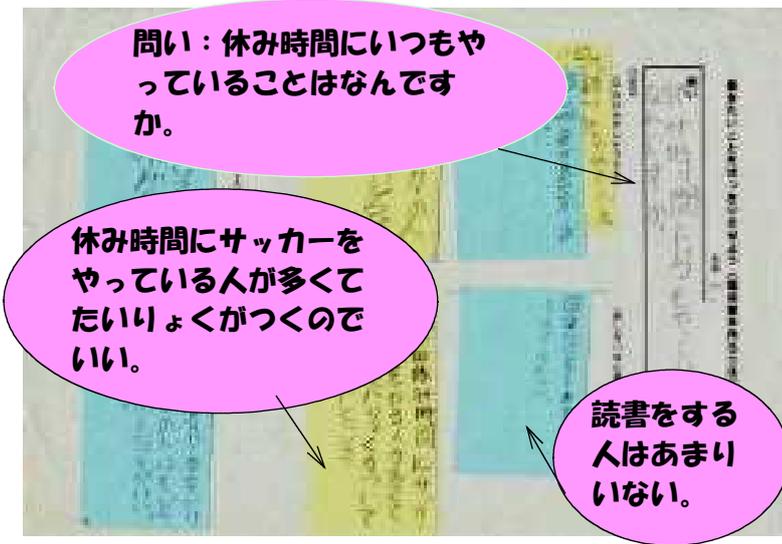


図2 話し合いに使ったワークシート

出た時に、学級全体で取り上げて考えを深める視点として紹介する予定だったが、今回は出なかった。

今回は出なかったが、交流活動のよさの一つでもあるので、今後も意識して取り組みたいと考える。また、最終的に、話し合いで使ったワークシートは付箋紙を貼った状態のまましておき、報告文を書く際の参考とさせた(図2)。

4 考察

本時で扱った付箋付きのワークシートを使って、児童は報告書の文章を書いた。完成した児童の報告文を読むと、どの文章も原因や理由を挙げた児童なりの分析がなされた文章になっていた。また、児童が文章を書いている様子を観察していると、集中して書いている児童が多かった。

さらに、学習後のアンケートの結果を見ると、以下の通りとなった。

- 交流活動によって自分の考えがはっきりした…… (88%)
- 交流活動によって自分の考えが広がった…… (83%)
- 学級の問題点をはっきりさせることができた…… (72%)
- 意欲を持って書くことができた…… (66%)

このことから、児童同士で互いの考えを交流する場面を設定したことで、考えを広げたり深めたりして、書きたいことを明確にして書けたと言える。しかし、意欲については、まだ十分とは言えない。また、学級内での報告なので、相手が身近すぎて相手意識が弱くなってしまったという課題が残った。そこで次の実践では、今回の実践では意識が充分ではなかった相手意識と目的意識を持たせることに重きを置くことにした。



図3 アンケート結果を基にした話し合い

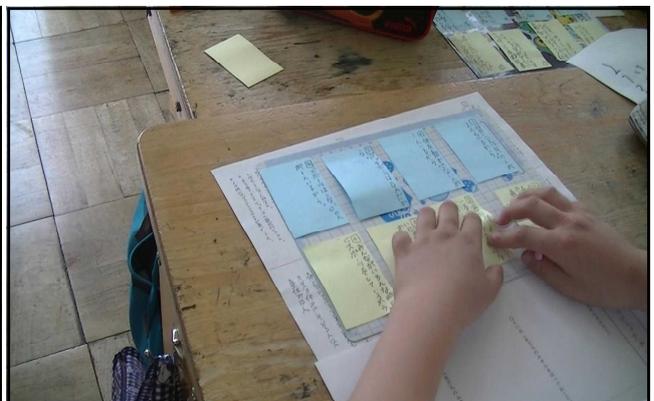


図4 色分けした付箋紙への書き込み

また、グループのテーマによっては「好きなスポーツ」についてなど、問題点を出しにくいグループもあったが、それらのグループにとっては、交流活動がより効果的であった。初めは意見を出すのに苦労していたが、意見をどうにか出し合ってながめ、話していくうちに、考えをまとめることができていた。このことも、自分の考えを明確にして、書きたいことをはっきりさせることにつながった。

より深い考えに気付かせ、話し合わせたいと考えて、一つの結果に対し、反対の意見(ある児童は良い点とみなしたのに対し、別の児童は問題点とする)が

実践2

- 1 単元名 「3年生に委員会紹介リーフレットを作って贈ろう」
教材名 『仕事リーフレット』を作ろう」光村図書（第4学年 2学期）

2 本単元及び本時について

本単元では、単元の最初に「3年生のために委員会活動を紹介したリーフレットを作り、委員会選びの参考にしてもらおう」という学習のゴールを設定しておいた。そしてリーフレット作成の前に、説明的文章「アップとルーズで伝える」で、写真と文章を対応させて読みながら、対比的な段落関係をつかみ、それを含んだ文章全体の構成を捉える学習をした。そして、その学習を活かし、写真に対応させた対比的な段落関係の文章を書いたリーフレットを作成した。

本時は15時間計画の第10時で、リーフレットを作成するために、相互の段落が対比関係になった構想メモを書く活動をした。その際、構想メモは完成したリーフレットをイメージできるワークシート形式を採用した。

3 授業の実際

導入においては、図5のようにリーフレットの完成見本を提示し、本時がリーフレットのどのページの作成のために行う時間か示した。そのことにより、児童は3年生に向けて自分が作るリーフレットをより具体的に想像することができ、意欲を高めることができた。さらに、リーフレット作成には構成メモを使うことを話し、「段落どうしの関係に気がつけた構成メモを作ろう」の学習課題を確認した。リーフレットは、3年生が委員会活動を選ぶときの参考にするために作るのだから、委員会の知識や経験がなくても分かるように書くことを伝え、相手意識や目的意識の再確認をした。



図5 完成見本を提示して説明



図6 撮影計画の話合い(実践1を踏まえた交流)

その後、まず委員会の「活動全体のこと」について必要な事柄を考えさせた。「活動全体のこと」では、それぞれの委員会活動の、「いつ」「どこで」「どんな活動(仕事)をしているか」について構成メモに書き込ませた。委員会によって当番活動が中心だったり、行事での活動が中心だったりの違いがあり、簡単には書けない児童も見られた。なかなか書けない児童に対しては、個別に説明を加えるなどの支援を行った。その際、「3年生が知りたい情報は何だろう」「3年生が初めて知ることは何だろう」など、学習の最終ゴールを意識させる言葉がけを行い、相手意識、目的意識の継続が図れるように配慮した。

次に、「特に伝えたいこと」を考えさせた。その委員会を経験していないと分からなかったり、気付きにくかったりすることに目を向けさせたが、その際も、個別の言葉がけと同様に「3年生が驚くようなことは何だろう」と投げかけ、クラス全体に向けて相手意識、目的意識の継続を図った。実際には、お願いごとを書く児童が多かったが、その児童たちも3年生の教室の位置を考えてのお願いなど、相手と目的を意識することができていた。

さらに、同じ委員会同士に分かれ、構想メモを基にして写真の撮影計画を立てさせた(図6)。これは、実践1の手立てである「考えを広げたり深めたり、自信を持ったりするために、児童同士で互いの考え

を交流する場面を設定する」を踏まえたものであり、この交流により、使う写真をイメージしてより書きたいことを明確にすることができた。

また、本時で採用した構想メモは、ページのレイアウトによっては切り取って表紙や裏表紙の部分になるワークシートと貼り合わせ、完成したリーフレットと同じ形式になるようにした(図7)。

このことにより、完成段階よりも前から完成品をイメージすることができ、学習の最終ゴールである、「3年生に委員会選定の参考にしてもらえるような、委員会活動を紹介したリーフレット」を意識させた。同時に、「アップとルーズで伝える」での学習を振り返ることで、対比の関係について思い出させ、リーフレットの互いのページが対比関係になることを確かめるなどして、単元全体で学習を進めている意識を持たせた。

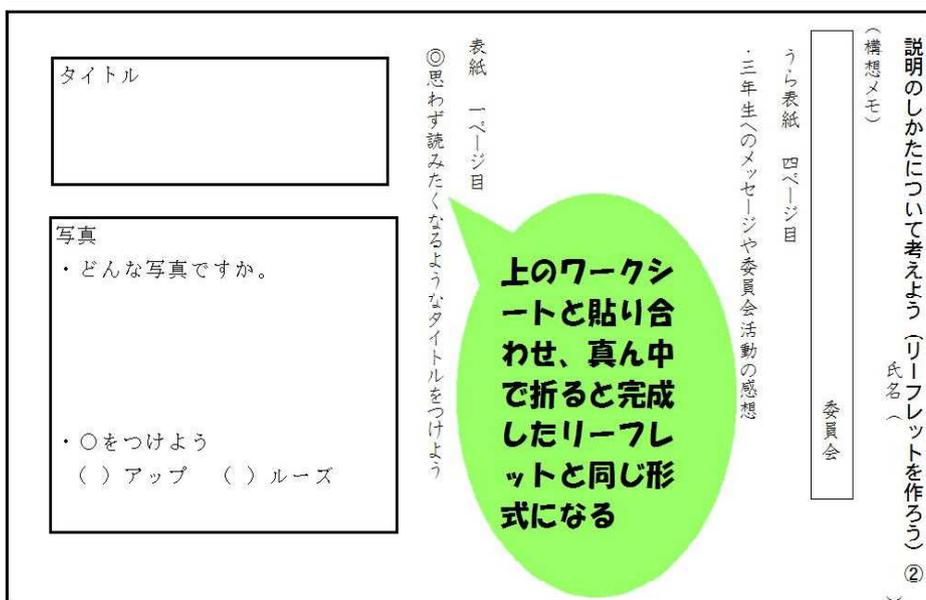
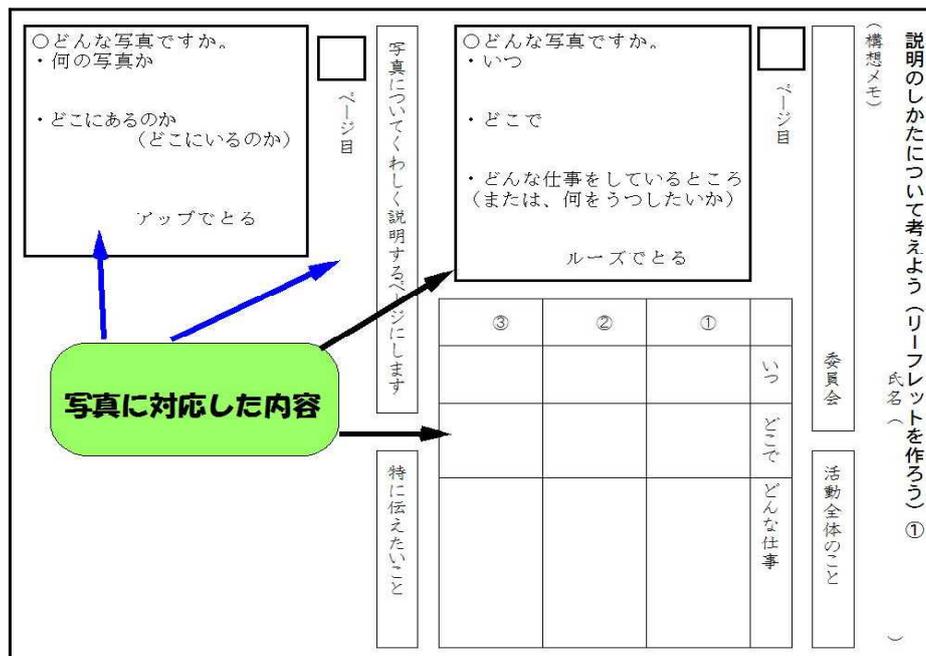


図7 貼り合わせると、リーフレットと同形式になるワークシート(上段①を本時で使用)

4 考察

自分の委員会活動を、次年度初めて委員会選定をする3年生の参考になるようにリーフレットにまとめるという設定をして単元を通して学んだことは、児童の学習への意欲を喚起し、相手意識や目的意識を常に持たせるのに有効であった。このことは、完成したリーフレットを手にして「3年生喜ぶかな」や「ちゃんと役に立つようなリーフレットにしなきゃ」などの児童のつぶやきからも分かる。また、リーフレットと同形式のワークシートの使用は、完成品を意識することにより、目的意識を更に強化することにもつながった。

さらに、学習後のアンケートの結果を見ると、「3年生を意識してリーフレットを作った(89%)」「委員会選定の参考となるようなリーフレットを作った(89%)」「構想メモは作成することで、完成品を意識できた(74%)」「学習のゴールを設定したことで、常に自分の書きたいことがはっきりしていた(74%)」「自信を持って書くことができた(79%)」という結果だった。このことから、相手や目的を常に意識させることで、相手意識や目的意識を持って書けたと言える。